

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

山頭火、「風来居」雑記

和田 健 (詩人・当センター運営協議会委員)

山頭火が、今日あんなに有名になろうとは、私が「風来居」^{ふうらいきよ}に出入りしていた当時、想像したこともなかった。

昭和13年(1938)11月末、山頭火は五年余庵住した小郡「其中庵」^{ごちゅうあん}から、リヤカーを自分も引き、私の友人も手伝って山口市湯田前町^{たまえまち}、龍泉寺の上隣り、徳重家の別棟(離れ)、四畳一間に移って来た。

それまでに、その年の11月4日、詩人・中原中也の生家の庭で山頭火を中心に1枚の写真を撮っている。(別掲)

なぜ、良き友、後援者でもある小郡の国森樹明や伊藤敬治らの友情を断ち切って山口に来たのか、この疑問を山頭火研究の第一人者である大山澄太先生に、後年私は尋ねたことがある。返ってきた言葉は、「人間関係では…」という一言だった。「さもあらん」と、私も思った。「雨ももりだしたか…」だけが理由ではなかったのだ。

湯田・風来居時代の山頭火を囲んだのは、主として私たち「詩園」^{かこ}の若き文学青年たちである。年にしてみんな二十歳前後であった。もっとも、スポンサー的存在であった書店主の矢島行隆やプリント屋の下井田清は年長で別格であった。

「詩園」は、最後には戦局の変化もあり、終戦前に廃刊の運命をたどるが、中也顕彰を旗印に毎号、中也の詩を掲載したことは、忘れることはできない。

また、中也の母堂フクさんが、山頭火に同情し、握り飯を子供(吳郎・十郎)^{ごろう}に持たせたことは、山頭火の日記にも出てくる。

さて、戦後、「風来居」の再建を考えた市の首脳もいたが、持ち主のOKをついに得ることができなかった。せめて標柱でもと、私が当時の女主人から承諾をとったが、その金は「あんたが集めてやれ」と、文化協会の会合で一蹴され、その後この件は沙汰やみとなって、今に至っている。



▲ 昭和13年11月4日写 (中也家中庭にて)

中原中也夫人

中原中也母堂
フクさん

山頭火
(56)

和田健
(23)

福富忠雄(詩人)

山頭火は、大学が休みになると、わが子のように中原呉郎の帰りを待ちわびた。私を入れ3人で湯田の“千人湯”に夕方出かけたこともある。山頭火は骨格は確かで、私のようにやせっぽちでなく、上の前歯が1本だけ残っていたが、よく飲みよく食べた。

「風来居」は終戦前に解体された。私の撮った写真が1枚あり、ヒマの木が1本写っているが、これも戦争の形見といってよい。

山頭火は其中庵では、あの小さな机を南の窓ぎわに置き、びんかコップに野の花をいつも活けていた。

横の露地に七輪を持ち出し煮炊きしていたとは、後に近所の人から聞いた。便所は棟続きにあり、井戸は母屋と共同で中庭にあった。

家主の徳重さんは、2人の息子によくこう言っていたそうだ。「裏の小父さん（山頭火）は今に偉い人になるぞ」。徳重氏は小さな新聞を出したり、ドイツ語の私塾をやっていた。

山頭火が終焉の地、四国松山に旅立つ前、知人に身のまわりの物を分け与えて回った。

私は山頭火が履いていた地下足袋とアルミの鍋をもらった。山頭火は富裕な家庭に育ったが、昔かたぎで物を大切にすることが身に付いていたに違いない。つまり「もったいない」の手本みたいなところがあった。

私が接していた頃の山頭火は55、6歳。いつもひょうひょうとした感じだった。私の仕事場（市の洗濯授産場、後河原）にも時々現れたが、作業の小母さんたちと、にこにこ大火鉢を囲んで話しこんでいた。

山頭火は風来居時代は、市内での行乞^{きょうこつ}はしなかった。後で知ったが、満州で勤めていた息子の健^{けん}さんが、月20円くらい送っておられたようだ。最後に風来居での一句――



▲ 風来居（後ろは龍泉寺）

一羽来て啼かない鳥である

（筆者96歳）

平成22年度 山口県立大学公開講座 やまぐちの文学

会場：山口県立山口図書館 第1研修室 時間：10：30～12：00 受講料：無料

月 日	内 容	講 師
6.12 (土)	山口の女性作家たち	山口県立大学名誉教授 福田百合子
6.19 (土)	嘉村礒多とやまぐち	当センター研究員 加藤 禎行
6.26 (土)	江戸時代の小説に描かれた大内氏	当センター研究員 木越 俊介
7. 3 (土)	山口市に伝わる鷺流狂言	当センター所長 稲田 秀雄



俳句維新伝道の人 山頭火

窪田 耕二 (山頭火ふるさと会会長)

山頭火ふるさと会は、昭和55年5月に、山頭火研究会として発足。平成4年、全国フォーラム開催を機会に改称しました。

会の目的は、防府市八王子2丁目に生まれた自由律俳人種田山頭火の顕彰活動。句碑建立や偲ぶ会や生誕祭の開催、同時に山頭火が目指した新しい俳句の形、俳句維新とも言うべき自由律の俳句普及で、あわせて全国規模の自由律俳句大会（昨年12月第30回大会）と、全国ゆかりの地での全国フォーラムを開催しています。



▲筆者（第18回フォーラムにて）

3回山口県小郡町、4回宮崎市、5回防府市、6回長崎県島原市、7回福岡県糸田町、8回愛知県美浜町、9回愛媛県松山市、10回防府市、11回兵庫県高砂市、12回長崎県平戸市、13回大分県湯布院町湯平、14回熊本県八代市日奈久と行脚の跡を辿ってきており、第15回フォーラム（平成18年11月）は、第21回国民文化祭文芸の部・自由律俳句部門として「俳句維新・癒しの俳人種田山頭火」をテーマに全国発信、大きな成果をあげることができました。

引き続き16回東京都荒川区、17回山口県山口市、18回愛媛県松山市と開催、今年10月には、庵住を希望しながら果たせなかった山口県下関市の川棚温泉での開催が決定、直木賞作家古川薫さんの「下関と山頭火」を題材にした講演が予定されています。

研究会時代を含めると、今年は記念すべき設立30年目。新しい企画として、その生涯と作品をテーマにした「山頭火検定」や、活動を支援するためのNPO法人の設立などに取り組んでいきたいと考えています。

山頭火は、行乞流転の旅の中で、生活即俳句、季語や形にこだわらない人間の心の奥に語りかける魂に響く、珠玉のような俳句で今も全国的な人気を得ており、県内はもとより全国の山頭火ファンに呼びかけ、会員組織で運営しています。会費とボランティアで運営しており、会員は28都道府県600人余、年間4回、季刊の「山頭火新聞」が機関紙代りで、全国へ山頭火情報を発信しています。

全国フォーラムは、平成4年10月に、生誕地防府市で第1回フォーラムを開催、2回熊本市、



▲講演中のドナルド・キーン氏（第18回フォーラムにて）

寄贈図書 (2009年11月～2010年4月)

岡輝明『錦秋の盃』 (2009年)

寄贈雑誌 (2009年11月～2010年4月)

『ひとごち山口』2009秋冬号、2010春夏号 (山口県広報広聴課) ・ 『文芸山口』第288-290号 (山口県文芸懇話会) ・ 『香臈人』VOL.18 (香臈人短歌会) ・ 『あらつち』第652-656号 (あらつち社) ・ 『其桃』第780-784号 (其桃発行所) ・ 『ほうふ図書館だより』No.252-256 (防府市立防府図書館) ・ 『現代山口詩選』通巻46冊 (山口県詩人懇話会) ・ 『季刊ふるさと紀行』平成21年冬の号 (第120号)、平成22年春の号 (第121号) (ふるさと紀行編集部) ・ 『郷土資料新着ニュース』No.44 (山口県立山口図書館) ・ 『颯』第83号 (颯事務局) ・ 『和海藻』第25号 (豊北郷土文化友の会) ・ 『中原中也記念館館報』第15号 (中原中也記念館)

編集後記

▼センターだより15号をお届けします。▼今号は種田山頭火特集としました。山頭火と交流のあった本センター運営協議会委員の和田健氏に、思い出とともに、様々な逸話を綴っていただきました。その作風の通り、自然のまま生きた山頭火の人柄が偲ばれます。また貴重な写真も提供していただき、山口の地に暮らしていた山頭火の姿がくっきりと浮かび上がります。▼さらに、山頭火ふるさと会で日々、顕彰活動を行われている窪田耕二氏に、会の来し方と今後の方向性などをご紹介いただきました。研究会として発足した会が、窪田氏をはじめとする会の方々のネットワークにより、毎年全国規模でフォーラムを開催し続けているという発展性・持続性には、郷土の文学の魅力を発信していこうという強い思いがひしひしと伝わってきます。▼本年の公開講座は6月から県立図書館で行われます。図書館との連携の一環としての新たな試みです。どうぞよろしく願いいたします。(K)



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜島3-2-1)
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2010 (平成22) 年5月31日